掲載日:2019年07月30日,面名:LB0XX0,記事ID:K2019073000000017200
(C)河北新報社

がんゲノム医療を強化

患者の遺伝子変異調査・治療

東北大病院と連携病院を結んで開かれるエキスパートパネル

東北大病院は、がん患者の遺伝子変異を調べて治療に生かす「がんゲノム医療」の底上げに力を入れる。6月、公的医療保険の対象として二つの「がん遺伝子パネル検査」の適用が始まり、需要拡大が見込まれる分野だ。全国で11カ所あり、東北では唯一となる「がんゲノム医療中核拠点病院」の同病院は、他病院との連携強化でがん治療のフロンティアに挑む。

中核拠点 東北大病院

■遠隔通信で会議

「しっかり情報共有していきます。今日もよろしくお願いします」

6月21日、仙台市青葉区の東北大病院大会議室。がんセンター長の石岡千加史教授がスクリーンの分割画面に映し出された出席メンバーに呼び掛けた。

東北、新潟の八つの「がんゲノム医療連携病院」と遠隔通信で結んだ会議「エキスパートパネル」だ。がんや遺伝学の専門医ら総勢約100人が参加し、がん遺伝子パネル検査を受けた進行がんの患者を取り上げる。月1回程度開かれ、この日は11症例を検討した。

同じ肺がんでも、個人によって薬の効き目は異なる。その差を生む遺伝子変異が患者のがん細胞や血液にないかどうかを調べ、最適の薬を投入するのががんゲノム医療だ。

がん遺伝子パネル検査は、多数の関連遺伝子を同時に調べる。この検査の発達と、遺伝子変異した分子に狙いを定める分子標的治療薬の開発が、がんゲノム医療を大きく進展させた。

こうした遺伝情報などに応じた治療に着目し、東北大病院は2017年4月に「個別化医療センター」を設置。同年6月から自由診療でパネル検査を開始した。全額自己負担で40万～90万円にもなる検査だが、患者のニーズは高いという。

ただ何らかの遺伝子変異を捉えたとしても、治療薬はまだまだ少ない。東北大病院のエキスパートパネルに上がった約90人の患者で、新たな薬を提案できたのは約1割だ。他の中核拠点病院でもほぼこの水準にとどまるという。

東北、新潟 8ヵ所と連携

◆東北、新潟のがんゲノム連携病院
- 弘前大病院
- 岩手医大病院
- 宮城県立がんセンター
- 秋田大病院
- 山形大病院
- 福島県立医大病院
- 新潟大医歯学総合病院
- 新潟県立がんセンター

■精度向上目指す

「治療薬や体外診断薬の開発を進める必要がある」と石岡教授。治験や先進医療、患者申出療養制度といった枠組みで未承認薬の臨床研究を進めるなど、時間をかけながら治療の精度向上を目指す。患者の検体を集めたバイオバンクを基にゲノム情報を解析する「未来型医療創成センター」、岩手、宮城の健常者約16万人分の情報を蓄積した国内最大級のバイオバンク「東北メディカル・メガバンク機構」など、東北大独自の資源がそれを支える。

東北大病院で、二つのがん遺伝子パネル検査の保険診療が始まるのは8月中旬ごろの見込み。エキスパートパネルの頻度を増やし、症例の増加に対応する。

「がんゲノム医療はこれまでのがん治療の仕組みや創薬のあり方を転換する可能性を持つ」と石岡教授。「各地の連携病院と協力し、域内のどこでも同じレベルの医療を受けられる環境をつくっていきたい」と話す。